

第一章 教育者武田ミキの生き方

1 教師を目指して

精神風土

一九〇一年（明治三四年）十一月二十日、武田ミキ学長（以下、敬称略）の人生が始まる。所は広島県の東南端、沼隈郡千年村字常石である。『沼隈郡史』によると、「千年村は農業の外畷表花ムシロを織り、常石には石炭廻送業者多く、能登原には漁業者あり」とあるように、ミキの生家神原家も船業であった。神原嘉平治、ハマの十人目の子ども（五女）として生まれるが、生後三ヶ月で母親を、八ヶ月で父親を失う。しかも、当時生家は、船業不振に加えて父親が借金で保証人になったがため全財産を没収され、赤貧の状態にあった。そんな中、以後、ミキは兄姉の手で養育されることになる。こういった家庭環境のため「早くから自立心をもった」が、兄が結婚し義姉に養育される頃（小学校五年頃）には、「自分の境遇の哀れさを感じ、時には劣等感を持つようになった」と、学長は述懐している。

一九〇八年（明治四一年）四月四日、ミキは常石尋常小学校に入学する（写真）。男子十四名、女子二十名の入学者である。この前年、一九〇七年に小学校令が改正され、尋常科を六年、高等科を二―三年とし、義務教育年限が六年に延長されている。『可部町史』によると、「改正に伴い、積極的に就学奨励・出席奨励が行われた。また、この頃から校訓・校歌を制定し、朝会を行って児童に対し忠君愛国の精神を注入し、児童の礼儀作法等の訓練を行っていったのである」（八五一頁）。

さらに世の中に目を向けると、一九〇八年（明治四一年）には、日露戦争後の人心の浮華を戒めるために、戊申詔書が出されている。ミキの通った常石尋常小学校でも、



常石尋常小学校八幡神社校舎（明治41年-大正13年）（最後列右端が学長）

勤儉が説かれ児童貯金が行われていたことが、当時の「小学校一覧表綴」に記されている。このような子ども時代の体験が、その後のミキの精神風土の形成に大いに影響していると思われる。

井上マツヨ先生との出会い

ミキの在籍した頃、尋常小学校の教科は、一、二学年が、修身、国語、算術、図画、唱歌、体操、操行で、三学年になると裁縫、手工が加わり、四学年以降は更に、日本歴史、地理、理科が加わる。ミキの学業成績をみると、どの科目も一度は乙あるいは丙をとっているが、六学年には全ての科目を甲にしている。小学生の頃より、努力の人であることが伺える。

ところで、四年生の時、ミキは運命的ともいえる出会いをする。井上マツヨ先生との出会いである。ミキ学長の甥神原要氏は語る。「貧乏で親もおらん子が、熱心に勉強したがるのが不びんだっただけでしょうね。とてもよく個人指導をもらったようですよ」と。兄妹の愛情には恵まれていても、実際の生活で幼いミキを十分に満足させることはできなかったであろう。そんな中で、勉強好きのミキの思いを汲み取り、応えてくれた井上先生に、ミキは強く心を動かされた。ミキは井上先生と出会って、「自分は井上先生みたいな先生になりたい、なろう」と決心した。幼い頃より自立心が強く、将来何か独立してやりたいと思っていたミキは、井上先生との出会いによって、自分の将来を具体化するのである。要氏によると、学長は里へ帰ると今でも、かつて井上先生のお宅のあった方へ向き手を合わせておられる

という。恵まれぬ幼少期、自分の思いに伝えてくれた恩師の愛情に、八十年を経た現在もなお、感謝の念を忘れぬ学長の姿がそこにある。

当時、子ども達はどうな生活をしていたのだろうか。ここに、『千年村日記』というものがある。山本瀧之助氏が、「百年後の千年村の為」に、明治四十年から四三年にかけて書き記したものである。氏は、ミキが入学した時から三学年の九月まで校長であり、後にミキの教師生活に大いに影響を与えた人物である。その日記から、特徴あるものを拾ってみよう。子ども達は、ベース（野球）やテニス、家族合わせ、常識カルタ（資料一）をして遊んでいる。あるいは世相を反映して、紙の連隊旗を立てて戦争遊びをしたり、「道は六百八十里」を歌って歩いたりしている。磯で貝やえびを採り、それを売ってもいる。御大師さまや新嘗祭には、地域の人達から接待を受けたり、お小遣いを貰っている。学校では、月初めに八幡社を参詣し、時には境内の掃除もしているし、地域性を反映して、七月に蘭刈休みがあった。

資料一 常識カルタ

（明治四二年五月四日「青年の天地」より抜粋）

- 一 二宮尊徳翁の教訓——至誠、勤勞、分度、推讓
- 一 世界の五大強国は——英吉利、亞米利加、日本、仏蘭西、伊太利。
- 一 日本内地の道府県は——一道三府四十三縣
- 一 国体の二大別は——君主国体と民主国体
- 一 学齡は——満六歳より満十四歳まで。
- 一 予備兵役は——陸軍四年四箇月、海軍三箇年。
- 一 我國の国体は——君主国体。
- 一 家督相続届出は——三十日以内。
- 一 軍隊勅語のご箇条は——忠節、礼儀、武勇、信義、質素。

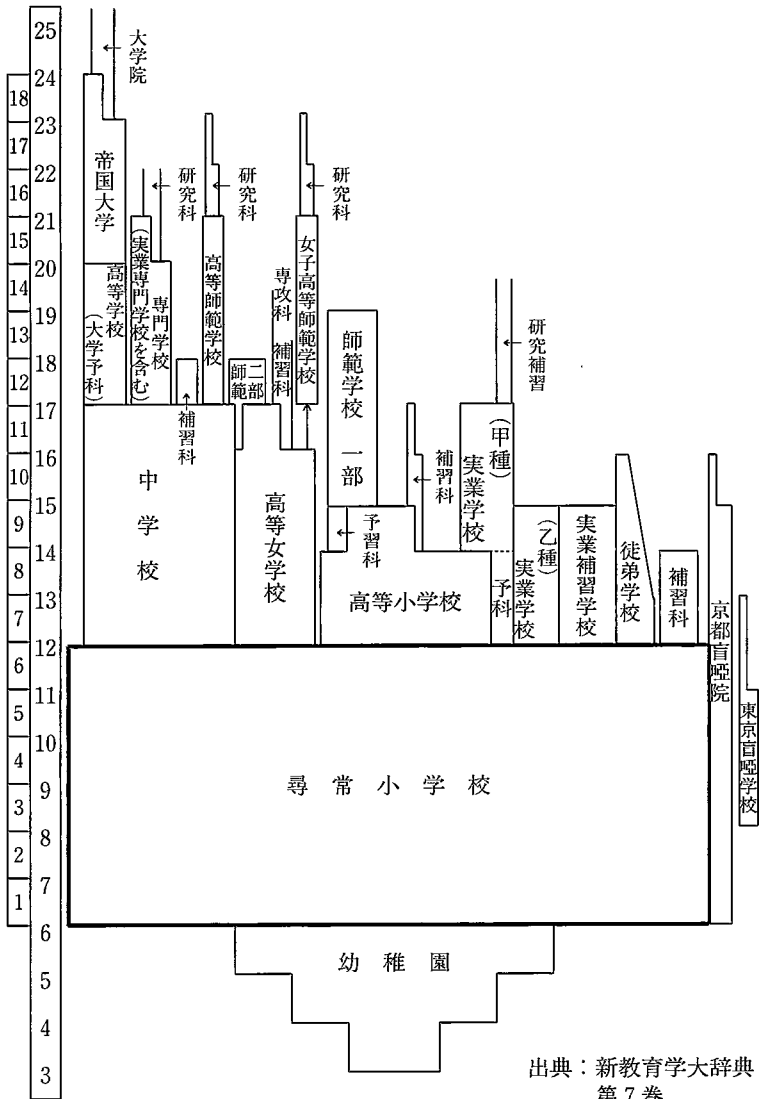
高等小学校への進学

一九一四年（大正三年）三月二八日、ミキは常石尋常小学校を卒業し、千年高等小学校へ進学する。卒業生は、男子十五名、女子十七名の計三二名である。この内、男子十一名、女子六名が高等小学校へ入学している。女子が三分の一しか進学していないこと、加えて家庭の事情を考えると、ミキが高等小学校への進学を家族に願い出るのに、さぞ言い出しにくかったであろうことが推し量られる。しかし、教師を目指すミキにとって、上級学校への進学はどうしても果たさねばならぬことであつた。その進学への熱い思いを、尋常小学校最終学年に、ミキは、全教科「甲」という形に表してみせた。

ここで、当時の学校制度をみてみよう（資料二）。教師を目指すミキが、尋常小学校を終えて進学できる道は二つ。高等女学校か、高等小学校への進学である。高等女学校への進学は、経済的に無理である。ミキの身近では、檀那寺のお嬢さんが進学しているにすぎない。相当裕福な家庭の子どもでないと叶うものではないことは、ミキにも十分わかつていた。

全教科「甲」という成績が説得力を持ったのか、ミキは、高等小学校への進学を許された。これより二年間、村の中央草深までの約四キロの道程を通うことになる。教師を夢みて、向学心に燃えて進学したのであるが、「この二か年は家庭環境の影響からか、安定感がなく、不安で不愉快な毎日で、勉強も振るわなかった」と、学長は述懐している。

學年 年齡



出典：新教育学大辞典
第7卷
(第一法規.1990)

進学資金づくり

二年の月日が流れ、一九一六年（大正五年）三月、ミキは高等小学校卒業となる。さて、将来をどうするか。家族は、地域の仕事である畳表を織って娘時代を過ごし、適齢期がきたら結婚すればよい、といった考えであつたようだ。むろんミキにそのような考えは全くなかった。頭にあつたのは、ただ教師になることだけだつた。進学志望を実現するにはどうするか。それには学資を作ることだと考えたミキは、それを行動に移すことにした。どのようにしたか。『武田学園創立三十五周年記念誌』に、学長自身が決めたように記している。

「丁度その頃、我が村にある三島医院の薬局に人がいるということを知ったので、そこへ頼んで入れてもらい、学資を作ろうと決心した。それにはまず家の者の承諾を得ねばならぬ。おどおどしながらも勇気を出して、義姉に三島医院で働くことだけを、まず第一段階として申し出て嘆願した。それは何とか聞き入れてもらった。早速、三島医院へ一人で行って実情を話してお願ひしたところ、快く受け入れて貰えた。ここで、住み込みで一年間忠実に働いた。先生にも奥様にも可愛がっていただいた。そして私の将来への希望も理解して下さっていたからか、報酬も身に余るものをいただいた。今でも私は節約する方であるが、この年の一年は特に節約をした。草履は竹の皮で作って履く、下駄の鼻緒を作ることはもちろん、下駄のはまを入れて履く等、四つ身仕立ての着物と羽織の二枚を合わせて本裁物に仕立て直して着るとか、娘であつても衣類や持ち物に対して新しい物、流行的な物などにあこがれたり心を奪

われたりすることは全然なく、仕事に専念すると共に自分の勉強にも精出した。一年間の報酬が六十円（月五四）、辞める時にはよく働いてくれたといわれて十円と反物を一反いただいた。私の小遣いは、月五十銭もいらなかった。それも、三人の実姉が時折色々な品物やお金をくれていたので、報酬には一切手をつけなかった」（十一—十二頁）。

ミキ学長は、幼くして生活面での自立あるいは精神面での自立を余儀なくされたが、十五歳にして、はや経済的自立をも目指したのである。ちなみに、当時の尋常小学校女子代用教員の月俸が三円程度であったことからすると、学長の働きぶりがいかに高く評価されたかがわかる。それは取りも直さず、学長の決意の固さを物語っているといえよう。

私立増川裁縫女学校進学

学資はできた。一年間の労働で得た七十円を元に出発しようと、ミキは決意する。その旨を義姉に願うが、なかなか了承されなかったようである。女は嫁いで子どもを生み、家庭を守るのが務めとされた時代である。学問に志を立てて職を得ようとするなど、容易には理解してもらえぬことであつたろう。しかし、ミキは決心を翻すことはなかった。了承を得られぬままに、進学することとなる。

さて、進学先をどこにするか。教職への道をストレートに考えると、予備科に入って師範学校に行くコースである。これだと、計五年かかる。とても行けたものではない。高等女学校に入る道もある。し

かしこれも、最低二年かかる。資金不足である。とにかく、短い期間で学資が少なくて、かつ実力のつく所でなくてはならない。そこでミキが選んだのは、私立増川裁縫女学校であった。

ここで、当時の学校制度をもう一度みてみよう（資料二参照）。実業補習学校というのがある。その教科に注目したい。「裁縫」がある。すなわち、裁縫の教師が必要ということである。さらに『可部町史』によると、「明治末期からの実業教育は、一九一〇年（明治四三年）実業補習学校設置要項が出されて以来、郡役所の積極的な奨励により、各地にあいついで実業補習学校の設立をみて大きく発展した。：（中略）：実業補習学校は授業料を徴収しないのを原則としていたが、大正二年から郡費でその費用を補助することになると、各学校（小学校）にあいついで補習学校が付設された。」とある（八四七—八四九頁）。まさに、我が国の実業教育は、国家的な要請となっていたのである。

実にいいところに目をつけている。短期間で学資少なく、教師（むろん助教諭）への可能性が高いところを見つけたのである。ミキは、教師に近づく次の一步を、私立増川裁縫女学校に踏みしめたのである。ミキは、勉強の内容はその人の心がけから深くも浅くもなるものだと考え、在籍中を通して、努力を怠らなかつたということである。

2 一教師として

教員検定試験

ミキは、増川裁縫女学校での学びで実力を養ったとはいえ、教員の資格は未だ有せずであつた。そこで、増川卒業後は自宅で教員検定試験の勉強に励むこととなる。ここで、「教員検定制」についてみておこう。

『日本近代教育百年史第一巻』に次のように記されている。

「一八七九年（明治十二年）の教育令により、有資格教員の積極的な補充策として教員検定による新しい方式が制度化された。すなわち、「但師範学校ノ卒業証書ヲ得スト雖モ教員ニ相応セル学力ヲ有スルモノハ教員タルモ妨ケナシ」（三八条但書）という一項が設けられ、この条項にもとづき、一八七九年十二月、「公立師範学校ノ卒業証書ヲ有セスシテ公立小学校教員タル者ハ各府県ニ於テ恰当ノ方法ヲ設ケ該教員ニ相応セル学力ヲ証明可致最其方法ハ文部省エ可伺出」という達が出された。…（中略）…一八七九年の教育令は、こうして初等教員の供給源を公立師範学校の卒業証書を得たものに限定する方針を明確に打ち出すとともに、教員検定制度も整備する方向を明確にした」（一二二七—一二二八頁）。また、「教員検定による国家的な資格基準である小学校教員免許状授与方心得は、師範学校教則大綱に先立ち、

一八八一年一月に文部省達として出された。検定による有資格教員の供給をいかに急いだかが理解される。すでに改正教育令（一八八〇年）は、教員検定の合格者に「教員免許状」を授与すること、授与権者を府知事県令とすること、免許状の有効区域を該府県内と規定していたから、ここではその他の資格に關する事項が規定された。教員免許状の種類は小学校の三等科に対応して、高等小学校教員免許状、中等小学校教員免許状、初等小学校教員免許状の三種とした（一条）。その適用範囲は師範学校教則大綱に同じく、高等小学校教員免許状を有するものは高等、中等と初等の、中等小学校教員免許状を有するものは中等と初等の、初等小学校教員免許状を有するものは初等科の教員になりうる（一条但書）。教員免許状の有効期限は「五箇年ヲ過クヘカラス」（二条）と規定され、師範学校の卒業証書より二年短くなっている。…（中略）…改正前の「一科若クハ数科の教授免許状」の制度は残置されたが、唱歌、体操、裁縫、家事、経済等の学科については、「特ニ之ヲ教授スルモノヲ置ク」ことが規定され、いわゆる専科教員の考え方を打ち出した」（一三三—一三三頁）。

ミキが教員検定試験を受験し始めるのは、一九二〇年（大正九年）頃である。当時は学校制度が変わり、小学校は三等科ではなく、尋常小学校と高等小学校なので、それに呼応して免許の種類も変わっていったと考えられる。ミキは、増川卒業後二年で、まず最初の免許を取った。尋常小学校の免許である。これにより、母校増川裁縫女学校の助手として迎えられ、教師としての第一歩を印した。一九二二年（大正十一年）のことである。井上マツヨ先生と出会い、教師になることを決意してから十年余りのこと

授業時間割の編成、教具・校具の増設等、教育内容改善案を立て、役場へも予算折衝に行き、予算増しでもらって、全人教育・婦道研修の場としての緒につけることができた（二一頁）。常により良い教育を目指し、即実行をモットーとするミキ先生の姿がここにある。

「ちようちん先生」は検定の神様

一九二九年（昭和四年）四月、ミキは呉市立阿賀実科高等女学校勤務となる。ここで在職中に、ミキは「検定の神様」と呼ばれるようになる。何故か。これについては、一九九二年四月一日発行の広島文教通信第三十九号に詳しく述べられている。掻い摘んで紹介しよう。

教員は聖職である。そう信じるミキは、自身が教育に携わっている喜びと誇りを、折りに触れて教子に語って聞かせた。そうするうちに、ミキのように検定試験を受けて教師になりたい、と熱望する者が出てきた。そこで、ミキは自分自身の体験に照らして、特別指導をすることにした。最初は居残り特訓で、放課後希望者を残して課外指導をしていた。国語も数学も各教科万般で、高等小学校本科は家事科であった。夜遅くなって帰るミキをして、人は「ちようちん先生」と呼んだという。数カ月経つと、居残り特訓だけでは済まなくなる。そこで、今度は家に連れて帰って、塾的特訓となる。初めは自宅で夕食を済ませてから家に来ていた生徒も、試験が迫ってくると、夕食もミキ宅でとり、泊まることもあった。長男を構う時間もないほどに、ミキは生徒の指導に没頭していた。一九三二年（昭和七年）、最初の

検定合格者がでた時には、二人で手を取り合ってボロボロ涙をこぼしたという。この最初の合格者をぜひ就職させたくて、ミキは奔走する。無事就職が決まると、生徒と共に赴任先へ出向き、挨拶廻りをした。自分が聖職と信じている教師に教え子がなってくれたことが、学長にとってどれほどの喜びであったか。ひしひしと伝わってくる。このようにして、一九三二年から一九四二年までの十一年間に、二十数名を検定試験に合格させ、大半を就職させた。こうしたミキの姿をみて、人は「検定の神様」と評した。学長は言う。検定試験に合格するためには、本人の意志と努力と熱意がないと不可能であるが、教育力の偉大さというものを、自分はこの体験を通じて知ったと。教育の基本は、まさに愛と熱意と根気だということを体得し、それが今日の自分の教育信念になっていると結んでいる。信ずるところは何があらうと実践していく、執念にも似た学長の気迫が伝わってくるエピソードである。

3 県指導主事として

県教育界での活躍

武田ミキは、大正末、実業補習学校にいる頃から、郡や県主催の教育研究大会に参加して、よく意見を発表していた。県内だけでなく、全国青年教育研究大会にも広島県を代表して三度出席し、研究・体験の発表をしている。昭和五、六年頃からは、講演会や講習会の講師としても、あちこちから招へいさ

れている。その中には、新採用教員講習会の講師もある。また、広島県青年学校家事教科書および同作
法教科書編纂委員の委嘱を県より受け、委員長を務めてもいる。そんな中、一九三三年（昭和八年）五月
三日、文部大臣より教育功労者として表彰を受ける。ミキ三二歳のことである。それから七年後、一九
四〇年（昭和十五年）十一月一日、紀元二六〇〇年記念式に、今度は広島県知事より教育功労表彰を受け
る。こういった活躍が評価されたのであろう。一九四二年（昭和十七年）、武田ミキは一教師から広島県
の指導主事になる。

世の中は、その前年（昭和十六年）に太平洋戦争が起こり、翌年には第二次世界大戦が開始されている。
暗雲が立ちこめ出した頃である。指導主事としてのミキの仕事は、社会教育の一環である女子青年・婦
人会の指導であった。が、当時は、銃後の婦人の力を強化するということが大きな目的であった。その
意味をもつての講習会・講演会・座談会、あるいは勤労奉仕、留守家族への慰問等々、各種の行事を計
画し、ミキは夜となく昼となく懸命にやったという。

一九四一年（昭和十六年）、小学校令が改正され国民学校令が発足することになる。小学校令から国民
学校令への改革のねらいは、『日本近代教育百年史第一巻』によると次のように説明される。すなわち、
「東亜ニ於ケル新秩序ノ建設」を任務とする国民学校の皇国民錬成の教育は、産業と国防の基礎を固
めることによって、国力を充実させ、国外に向けて「八紘一字の肇国精神」を顕現することを期待され
ていたのである」（五一頁）。この「八紘一字」をめぐる議論が紛糾したが、「此ノ言葉ハ、……宇宙

が日本国全部ニナル、……世界中が全部日本トナルト云フ意味」(五一三頁)と説明されている。

日本がこのような政策をとっている中、ミキは、国内の満蒙開拓義勇軍訓練所を見学した後、満州朝鮮視察に出向する。「満州独立を侵略などと思ひもしなかった。認識不足も甚だしい」と、学長は述懐している。朝鮮でも強制連行が開始され、植民地人民の皇民化教育政策として、日本語の普及政策がとられていた頃の視察である。

山本瀧之助先生を仰ぐ

武田ミキの教育人生を語る時、井上マツヨ先生と並んで重要な人物がいる。山本瀧之助先生である。

ミキが在籍した常石尋常小学校の三年までの校長である。が、それだけでなく青少年指導に生涯を捧げ、「青年の父」として全国に知られた人である。この山本先生の胸像が、戦前、東京青山の青年会館玄関にあった。文部大臣より教育功労表彰を受けたミキは、表彰状と勲章を持って山本先生の胸像の前に立ち、榮譽を報告すると共に、「私は一生、生ある限り、教育に捧げます」と誓ったという。

今少し、山本瀧之助先生を紹介しておこう。『広島県大百科事典』(中国新聞社、一九八二)には、次のようにある。

「一八七三年―一九三二年。社会教育家。沼隈郡千年村(現沼隈町)に生まれる。小学校卒業後、一八八九年(明治二十二年)尋常小学校雇となり、以後二十二年にわたり小学校教師、その間一九〇五年校



山本瀧之助先生頌徳碑

長に就任。一九一〇年（明治四三年）沼隈郡実業補習巡回講師に転じ、翌年、郡立実業補習学校長に就任、一九二一年（大正十年）その職を退いた。教師生活のかたわら、居村を中心に地域の若連中の改善に取り組み『吉備時報』『良民』などの青年団体機関誌を発行、また『田舎青年』をはじめとする数多くの青年団体関係の著述を発表し、退職後も民間教育団体などの嘱託講師として活躍した。一八九六年発刊の『田舎青年』は「青年を以て学生の別号なり」とする社会風潮を批判し、「田舎に住める、学校の肩書なき、卒業証書なき青年」に目を向けるよう呼びかけ、世間の注目を集めた」。

山本先生の経歴に、学長がだぶる。山本瀧之助先生もまた、学長にとって道しるべたる人であつたろう。人生の早い時期に、学長は生涯の師と仰ぐ人物を二人も得ている。これは学長の身の幸せであろうが、それを生涯大切にしているところに、学長の人間性を感じる。なお、「山本瀧之助先生頌徳碑」が阿伏鬼観音、磐台寺門前に一九三五年（昭和十年）に建立されている（写真）。

戦時教育の重み

一九四五年（昭和二十年）八月十五日正午、歴史的な天皇の詔勅放送が行われた。国民に終戦が告げられたのである。ラジオから流れる天皇の声に、日本国中が涙した。武田ミキも、全く予想しなかった事態に悔し涙を流した一人である。広島に原子爆弾が投下されてから、十日目のことである。日本は連合国に無条件降伏した。負けたのである。占領のため連合軍総指令部（GHQ）が置かれ、マッカーサーが最高指令官に就任した。武田ミキにとって、こういう事態は予想だにできなかった。その時を『三十五周年誌』にこう綴っている。

「私は実に一途に日本を信じていた。日本は強い、日本は必ず勝つと信じていた。また勝たねばならぬのだと張り切っていた。負けるなどとは夢にも思わなかった。また思いたくもなかったので、そんな事は考えもしなかった」と（三九頁）。

学長がどれほどの衝撃を受けたか。想像するに難くない。それまでの無理な生活がたたってもいようが、昭和二十一年の終わり頃から病に臥せったのは、やはりこのショックが相当に響いたのではないだろうか。

さて、占領政策の一環として断行されたものに、教育の民主化政策がある。『可部町史』によると、「広島県では、昭和二十年十二月に新教育に関する講習会が開かれたのを皮切りに、翌二十一年には、各国民学校などで、一月に修身・国史・地理の教科書の回収、御真影奉安殿の撤去、二月に木刀・なぎな

たなどの戦闘用訓練用具の処理が一斉に行われ、五月に教職員の適格審査、十一月に勅語・詔書などの取扱のそれぞれの通牒が発せられた。その後、二二年六月には宮城遙拝が禁止され、二三年八月には教育勅語・詔書の回収が行われるなど、指令への対応をめぐってめまぐるしい動きが見られた」（八八九―八九〇頁）。

こういった動きに伴って、指導主事武田ミキの仕事も百八十度転換した。戦争中は銃後の婦人の力の強化に努め、勝て勝てと一生懸命に県下を回っていた。それが戦後は明治憲法から民主憲法に変わり、国民はこの新憲法の下に生活しなければならぬので、ミキは、新憲法を解説して回るとか、新憲法による婦人の地位や役割が変わったことを説いてまわった。

そういった新しい仕事に追われる中で、ミキは病に倒れる。一九四七年（昭和二年）の四月から出勤できなくなり、同年八月三十一日付で退職する。

神原要氏との対談の中で、戦後、学長が戦中の仕事に対し、どんなに心を痛めておられたかを伺った。女子青年団の訓練にも、ひどく責任を感じておられたらしい。県を退職したのには、一つには働けない者が籍を置いては相済みぬという責任感があり、もう一つにはそれ以上に、かつての仕事に対する責任を感じてのことと思われた。

4 学校経営者として

学校創設の夢

県庁退任後、武田ミキは何を考えたか。小学校四年で教師になることだけを考へ、教職に就いて後は天職と思って努めてきたミキである。気楽な余生など、頭をかすめもしなかったようだ。病床の身でありながらも、ミキの頭にあつたのは、新生日本の建設に尽くすことだった。

ミキがまず目をむけたのは、政治の世界である。県の指導主事として、戦時下から敗戦後の教育の第一線に立ってきて味わった苦い経験が、ミキをして、政治の世界へ目を向けさせたのであろう。時あたかも、婦人参政権が認められて間もない頃のことである。しかし、この政治家への道は、親代わりであった兄勝太郎氏の強い反対に遭い、開かれることはなかった。「衆議院に出ようとしたんですがね、勝太郎爺さんの『教育の事しか知らんお前に何ができる』という言葉に、叔母は納得したようですよ。」と、甥神原要氏は語る。

では、何をするか。答はすぐに出了。学校を創ることである。それも、女子教育のための学校を。この学校を創ることについては、「一九三三年（昭和八年）に文部大臣から表彰され、山本瀧之助先生の胸像の前で、終生教育に捧げます、と誓った時から考えていたことだ。」と、学長は言う。それを、いよ

いよ決意したのである。学長論するところの「女性の性能の伸長」を目指した学校づくりが始まったのである。

「女子教育」への思い

武田ミキが学校づくりを考えたとき、なぜ女子教育なのか。また、女子教育を「女性の性能の伸長」としてとらえ、家事・育児能力の育成に力を入れたのはなぜか。あるいは、技術教育だけでなく、一般教養、特に道徳教育に力を入れたのはなぜか。その答は、武田ミキ学長が歩んだ道、学んだ学校、生きてきた時代にある。背景をみてみよう。

まず、それまでの武田ミキの教師歴を振り返ろう。一九二二年（大正十一年）母校私立増川裁縫女学校の助手を振り出しに、翌年一年間の小学校勤務以外は、実業補習学校女子部、続いて実科高等女学校、さらには指導主事として青年女子並びに婦人の指導にあたってきた。勤めた二十五年間は、まさに女子教育の真只中にいたのである。しかも当時、国の政策として実業教育が盛んに行われ、技術の習得が求められた。女子にとっての技術とは、裁縫を主とした家事技能である。ミキは一教師として、長く家事科を担当してきた。全人教育をしようとすれば、一般教養が重要であることも体験した。この間の教育実践の中で、女子教育に対する考え方を培っていったのである。が、その基礎は、生徒として助手として在籍した、増川裁縫女学校にみることができよう。

ここに、『増川ヒサ先生評伝』というのがある。増川裁縫女学校長であつたヒサ先生が亡くなられた一九五七年（昭和三二年）に出されたものである。増川ヒサ先生もまた、学長の生涯に大きな影響を与えた人物といえよう。ヒサ先生は、一八九六年（明治二九年）に小学校教師を辞めて、女子教育のために、「私立翠栄舎」という裁縫を主とした私塾を起こされた。これが後に学長が学んだ増川裁縫女学校となる。さらに時代を経て発展し、現在は、一部が県へ移管されて県立明王台高校に、一部が市へ移管されて福山市立女子短期大学になっている。『増川ヒサ先生評伝』によると、私立増川裁縫女学校は、「女子教育に関する時弊と時代の要求に鑑み、女子本来の天職に立脚して、學術に偏せず技芸を疎かにせず、特に国民道德の函養に努めて、質実有用の家庭的女性の教養を標榜して立つ子女を教養するを以て目的としていた」（五七頁）、とある。女子本来の天職は家事であり、家庭的女性を育てることが、女子教育に求められたことであつた。それに伴い、当時の学科課程は、裁縫が主で、手芸・割烹等技能科、さらに茶花道、修身、国語、習字、数学が科せられていた。ここで学長は、寮生活をしながら一年間懸命に学び、また一年間助手として勤めたのである。

時代のもつ力も大きい。『日本近代教育百年史第一巻』によると、「高等女学校令の生みの親である樺山文相は、一八九九年（明治三二年）高等女学校令の制定理由について演説したが、その中で彼は、健全な中流社会は男子の教育のみで足りあがることのできないから、高等女学校をつくり温良貞淑な中流以上の賢母良妻を育成したいと述べている。一九〇一年（明治三四年）文相に就任した菊池大麓も女子中

等教育の普及に尽力した一人であるが、彼は樺山文相の考えをさらに発展させ、数度にわたって女子教育の必要性を力説した。彼は社会的な仕事で男子の本分であるように、家庭を守るのが女子の天職であり、これは国家的見地からみてきわめて重要な仕事である。女子教育はそうした女子の天職を果たすことのできる「良妻賢母」を育成することにあるとする。良妻賢母の教育こそ、彼の女子教育振興論の基本的立場であった。かくして、家庭内における女子の特性と国家的見地から割り出された良妻賢母は、明治三十年代における女子教育整備の時期において、女子教育の正統的な目標概念として定着し、ここに女子教育即母性教育という基本型を確立するに至った。……（中略）……（しかも）女子教育の指導理念として立てられた良妻賢母には、女大学流に家族に奉仕するだけでなく、国家に奉仕する軍神の母としての意味がこめられていた。」（二一八―二一九頁）、とある。こういった時代に武田ミキは生まれ育ったのであり、世の中がこういった考え方の中で、女子教育に携わってきたのである。

だが、学長の論ずる「女性の性能の伸長」には、時代を越えるものがある。それは、女性がもっている性能を家庭に限定せず社会へ拓き、性能を伸長することによって、「自立」を目指した点である。女性が目立って生きていくためには、男性にはできないこと、男性がしないことが出来なければならない。男性と同じことしかできないならば、女性の存在価値は無い。学長はそう考えて、「女性の性能の伸長」を目標にした女子教育のための学校づくりに取り組んだのだろうと推察する。女性が一人前の人間として扱われなかったあの時代にあつて、ミキ学長の頭にあつたのは、「女性の自立」であつたと考ええる。

幼い頃よりのミキ学長の生き方が、筆者にそう思わせるのである。

広島県可部女子専門学校開設

一九四七年（昭和二年）十二月、武田ミキは、学校創設を目指して、いよいよ本格的な準備に取り掛かる。どのような状況であったのか。『三十五周年誌』をひもとくと、その苦勞の一端が伺える。

まず、資金づくりである。この点では、親代わりである兄勝太郎氏の力大である。といっても、勝太郎氏も、ミキの学校づくりをすんなり受け入れたわけではない。ミキの身体のこと、これからの苦勞を思い、相当頑強に反対したようである。しかし、「教育のために死ぬなら本望」というミキの固い決意に、できるだけの援助を約束してくれた。ミキが最も頼りにしている勝太郎氏の応援は、ミキにとって、何よりの支えであったようだ。兄の援助を仰いでも、それだけに頼ったわけではない。ミキは、衣類・持ち物一切を売って、資金を作ることにした。その斡旋を、昔の教え子達に依頼したのであるが、彼女達は実に懸命に、ミキに協力したという。恩師ミキに対する生徒の思いが察せられる。が、ここでも教え子を頼るだけではなかった。ミキ自身、持てる力を最大限に發揮している。当時は終戦後の物資の少ない時なので、古い物でも飛ぶように売れた。しかし、より高価にと、そのままでなく更生して売るようにしている。例えば、夏の紹の喪服の上下をワンピースに、羽織のスラセを子ども物の着物とちゃんこに、毛糸物を染めかえて若い者向きのカーデガンにといった、さまざまな工夫をしたのであ

る。

さて、学校を創るとなると、所在地が問題となる。どこにするか。「郷土の文化向上の一翼を担いたい。国土の一隅でもその地域において堅実な教育がなされれば、堅実な国家の一部分が出来るのだ」という考えをもつ学長は、本籍地安佐郡の中心地、可部町に所在地を定めた。『可部町史』によると、可部町は、「一九四七年（昭和二十二年）の臨時国勢調査では、一挙に一八〇〇八人という明治以降最高の人口数になり、ひしめきあいながら、戦後の混乱期を切り抜けていくのである」（八八五頁）とある。以後の町の発展を考えれば、いずれ教育施設も求められるはずである。

所在地が決まれば、土地を手に入れねばならない。ミキ自身、土地を捜して、町内を歩き回った。が、どうしても手に入れることができぬうちに、開校の日が迫った。それでも、他の地域へ変更しなかった。「何としても可部町で発足させたい」というミキの熱意が、当時の高宮中学校長、海渡氏を動かした。三カ月という期限付ではあるが、高宮中学校の一隅を借り受けることとなったのである。校地については、そこまで粘ったのであるが、結局可部町内に土地を購入できず、高宮中学校の一隅で開校したものの、三カ月後には、安古市町へ移転することとなる。しかし、「何としても可部町で」というミキの思いは強く、一九五四年（昭和二十九年）、遂に可部町への移転を果たすのである。

校舎をどうするか。これも土地同様、ミキ自身、可部の町を、北へ南へ、東へ西へと歩いたが、見つからなかった。やっと見つけた元高宮中学校の校舎も、苦勞して資金調達したにもかかわらず、競売に

敗れ、手に入れることはできなかった。その後、随分可部町を捜し回ったが、適当なものはない。しかし諦めず、建物の移動可能な範囲へ目を向けたところ、古市町所有の元軍需工場の建物を手に入れることができた。

備品も調達しなければならない。校具・教具・図書等、全く無からの出発である。ミシンは里から寄贈されたものの、机、黒板、教卓、げた箱、戸棚、標本等、百人分を自力で揃えた。他方、箒、雑巾等はミキ自身手作りし、また調理・作法等の教具は、ミキ自身の物を全て出して不足分を補うようにして、出来る限り出費を抑える努力を惜しまなかった。

物を整えるのと平行して、人を整えねばならない。教育課程に見合う教授陣の獲得である。教科は、和裁、洋裁、家事科（食物・育児・看護）を主にし、これに作法、茶花道、さらには一般教養（倫理科他）を計画していた。この時、かつて一教師であった時代の、武田ミキの実践が物を言う。「ちようちゃん先生」とまであだ名されながら、わが子も省みず指導して教員検定をとらせた教え子が、大きな力になってくれるのである。ことに新尾イチエ氏は、後一年で恩給になるのを棒にふって、はせ参じたという。ミキ先生の教え子に対する愛情がいかにか深かったか、如実に物語っている。教え子達の協力と共に大きな力となったのが、長男学千氏である。当時、広島文理大学二年生であった氏が、友人と共に、一般教養を担当した。家事科はむろんミキ自身が担当したのは、言うまでもない。

昼は物や人を整えるのに東奔西走する一方で、ミキは、夜は学校設置認可申請書の作成に没頭した。

学校設置の目的、学則、施設・設備、予算、教授陣等々、きめ細かい計画書を作成した。その甲斐あって、一九四八年（昭和二十三年）三月三十一日、無事学校設立が認可された。そして、同年四月十五日、高宮中学校内に、「女性の性能の伸長」、「社会に役に立つ人間の育成」を教育目標として、武田ミキは広島県可部女子専門学校（本科二年、速成科一年）を開校したのである。

高校・短大・大学・大学院への発展

学校開設の喜びも束の間、ミキはカリエスに倒れ、入院の身となる。一年後退院はするが、ベッドに置かれたギブスの中に仰臥する生活を余儀なくされる。ミキ校長は、教員室にベッドを持ち込み、ギブスの中に仰臥した状態で、学校運営にあたった。授業も教室へベッドを持ち込んで行った。この生活がなんと九年も続いたのである。

そんな不自由な身でありながらも、ミキはひたすら教育の充実を考えていた。心を育てる教育、知識技能の断片的な教育でなく教育が生活に結びつく教育、女性の性能の伸長教育によって実力ある役に立つ人間の育成に力を入れていた。従って、専門学校ではあっても、全人教育を根底に置き、一般教養を重視していたのである。ここに、すでに短期大学の素地を見ることができるといえる。

いかに充実した教育をしていても、専門学校では、高校卒の資格は与えられない。戦後、高校進学率は年々伸び、一九五八年（昭和三十三年）には、女子の高校進学率も五十パーセントを越える。高卒の資格

が物を言う時代である。上級学校への進学にも、高卒の資格がある。自分自身、より上級の学校への進学、より上級の資格を目指してきたミキ学長にとって、高校づくり、短大づくりは当然のこととして考えられたように思う。進学にも、資格取得にも人一倍苦労したミキ学長である。子どもたちにチャンスを与えてやりたいと願ったことは、容易に想像できる。ちなみに、一九五七年（昭和三十三年）四月、広島県可部女子高等学校を開校し、一九六二年（昭和三十七年）四月、可部女子短期大学を開学する。時あたかも、戦後第一次ベビーブームの子ども達が進学する時期である。「機をみるに敏なり」といえよう。なお、短大開学に伴い、その母体となった専門学校は一九六二年（昭和三十七年）三月三十一日をもって廃校となった。

より質の高い教育と共に学長の頭にあつたのは、教員養成である。実科高等女学校時代に、お互いに苦労しながらも、生徒に検定試験で教員の資格をとらせたことから伺える。ミキ学長は、短大の認可が下りるとすぐに、「中学校教諭二級普通免許状（家庭科）」の課程認定を受けている。女性の経済的自立を考える時、学長自身の体験からも、教師というのは重要な職である。教員養成という点からも、短大を創りたかつたのではないだろうか。母親として、わが子を生み育てることはむろん大事なことである。それ以上に、多くの子ども達の教育に携わる教員の仕事を、学長は非常に高く評価している。

被服科に始まった短大づくりも、食物栄養科、国文科、英文科と増設し、一九七〇年（昭和四五年）四月の幼児教育学科開設をもって、一応整えられた。その一方で、「地方の最高学府の機関としてはやは

り大学までは創りたい」という願いを、ミキ学長は、一九六六年（昭和四一年）四月に実現する。広島文教女子大学の誕生である。「女性の性能の伸長」「社会に役立つ人間の育成」を目指して、「全人教育」を根底に置き、「心を育てる教育」を実践してきた武田学園の教育は、ここにさらに深められる。また、大学開学と同時に、「高等学校教諭二級普通免許状・中学校教諭一級普通免許状」の課程が認定されている。教員免許も更に上級のもの取得できるようにしたのである。それだけでなく、一九八一年（昭和五六年）には、初等教育学科を開設し、小学校教員養成を始めた。教職を高く評価している学長が、ぜひとも創りたかった学科である。

「術」を認め、「学」を大切にしてきた学長は、さらに「学」を究める研究部門に目を向け、一九八六年（昭和六一年）四月、大学院を開設する。実力ある役に立つ人間を育成しようとすれば、研究に力を入れる施設が必要と考えられてのことだろう。広島県下、女子大には初めての大学院である。この大学院まで備えた教育機関をもって、益々地域文化の向上に努めていこうとしている、武田ミキ学長である。

5 九十年の歩みに学ぶ

武田ミキ学長の九十年の歩みを、教育者という側面から辿ってみた。その生き方を通じて、筆者が心動かされたことを三点にまとめた。

環境を生かす

ミキ学長は、人生のスタートから、家庭環境には恵まれなかった。生後三カ月で母親を八カ月で父親を失い、兄姉の手で育てられた。それも十歳の頃には、義姉という他人の手に渡った。したがって、十分に手をかけられることもなければ、甘えることもできなかった。自分のことは自分でせざるを得ない状況で育つたのである。しかも赤貧の状態にあつたため、経済的にも頼ることはできなかった。が、兄姉の愛情は十分に受けることができた。ミキ学長が、自分の境遇に、時には哀れを感じたり劣等感を持ったりしたが、決して捨て鉢にならなかつたのは、兄姉の愛情を感じそれに応えようとしたからであろう。さらに、「自分のことは自分でする」生活体験から、ミキ学長は、子どもの頃に既に、「自分の力で生きていく」ことを目指した。すなわち「自立」である。それも、経済的自立を目指した。当時としては極めて進歩的な生き方を、ミキ学長は、生活の中から学んだと言えよう。さらに、ミキ学長は、劣等感をも生きる力にした。両親のいない貧しい家庭の子だからこそ、なおのこと、「社会に役に立つ人間」になろうとした。社会に役に立つ人間になつて、認められようとしたのであろう。ミキ学長は、劣等感をためまぬ努力の原動力としたと言える。このように、ミキ学長の目指した自立は、「社会に役に立つ人間」になることを基礎としている。そしてこのことを、学長は自分自身の生き方だけにとどめず、教育理念として、今日の本学教育の中に息づかせている。すなわち、「女性の性能の伸長教育によって、実力ある役に立つ人間の育成」を目指した、教育実践につなげているのである。

ミキ学長は、人との出会いも自分の人生に生かしている。「将来何かをやって自分で生きていこう」というおぼろげなる思いを、井上マツヨ先生に遭って具体化した。小学校四年の時である。恵まれぬ家庭環境から、精神的に荒れた状態にあったミキ学長は、親身になって面倒をみてくれる井上先生の中に、自分の将来を見つけたのである。井上先生と出会って、「先生みたいな先生になりたい」と思っただけでなく、「先生になろう」と決心した。将来やろうとしていた何かを、自分で見つけたのである。義務教育が六年になって間もない当時であれば、進路がそろそろ話題になる頃であろう。が、たいていの場合、家や親によって子どもの進路が決められた時代である。その時代にあつて、ミキ学長は、自分で自分の道を決めたのである。自分で選んだ道、すなわち教師としての道を歩んで行くなかでも、ミキ学長は、親身になって面倒をみてくれた井上先生の姿に、教師としてのあり方を見出し出している。「ちようちん先生」と言われるほど生徒達のことに関心していたこと、あるいは学長が学校を創ると聞くと教えずが自分の都合など省みずはせ参じたことなどから、ミキ学長がどんなに親身になって教育に当たっていたかがわかる。学長は、自分が井上先生から受けた喜びを、今度は教師として生徒に与えていったのである。

生涯を教育活動に尽くされた山本瀧之助先生との出会いも、学長は大切にされた。学長が、生涯を教育に捧げることを誓ったのも、山本先生の胸像の前である。山本先生の生き様に、強く動かされたのころと思われる。また、増川ヒサ先生との出会いも、生かされている。学校づくりの中に、校長・学長と

しての在り方のなかに。教師を辞めて、女子教育のために私塾を開かれたヒサ先生。全てを投げ打って女子教育に尽くされたヒサ先生の姿は、まさに武田ミキ学長の姿である。

学長は、自分が勤めた職場も生かしておられる。実業補習学校時代に、技術に偏った教育の不備を目の当たりにし、全人教育の必要性を実感した。このことは学長の教育理念となり、学校創設当初から、専門学校ではあっても全人教育を根底に置き、一般教養を重視したこととつながっている。さらにこのことは、専門学校から短大・大学への学校の発展にもつながっている。

学長は、自分に巡り来るチャンスも、積極的に活用されている。県の研究大会では、研究発表をすると共に、討議にも積極的に参加し意見を述べている。これが認められて、全国大会へ県の代表として二度参加し、そこでも臆することなく積極的に意見を述べている。研修会・講演会・講習会の講師も引き受けた。教科書編纂にも携わった。これらが認められて、文部大臣表彰、続いて県知事表彰を受けている。教育界だけでなく世の中全体に、女性は軽んぜられていたし、女性自身も消極的であった時代にある。そういった巡り来るチャンスを積極的に生かす学長の姿勢が認められて、学長は県の指導主事に就くことができ、指導の場をさらに開いていったのである。

人間誰しも、さまざまな環境の中にいる。それぞれに家庭の事情を背負っている。まさに、環境との関わりの中で、人は生きている。その環境とどう関わるか。環境に振り回されていると、自分の人生を見失う。環境に押しつぶされると、自分の人生が失くなる。環境に積極的に挑んでいけば、自分の人生

に、環境を生かすことができる。そして、それは環境を変えていくことにもつながる。学長の生き方が、それを教えてくれた。

一歩一歩また一歩

井上マツヨ先生との出会いによって、教師になることを決意したミキ学長ではあるが、状況は極めて厳しかった。兄夫婦に育てられていたこと、経済的に余裕がなかったこと、女子の進学率が低かったこと、女子が職業を持つことが極めてまれであったことなど、いわば八方塞がりの状況であった。それでも、ミキ学長は諦めなかった。そんな中であって、進路が問題になる尋常小学校六年生の時、ミキ学長は、全ての科目を「甲」にして、自分の熱意を見せた。これが説得力をもったのであろう、高等小学校への進学が許された。教師を目指しての第一歩である。

高等小学校の二年間を無事終えることができたが、家族に認められたのは、そこまでであった。それ以後の進学など、話題にすらできなかった。進学するにはお金がいる。とにかく学資をつくることだと考えた学長は、町内の三島医院に住み込んで働いた。誠実な勤めぶりが評価され、思った以上の報酬を得ることができた。儉約に儉約を重ね、その報酬全てを貯金し、なんとか一年分の学資をつくったのである。これが、次の一歩である。

教師を目指していながら、師範学校への進学は到底考えられなかった。教師の資格は、検定で取るし

かない。とりあえず自分に教えられることは何かと考えたミキ学長は、裁縫に目をつけ、増川裁縫女学校への進学を決めた。ここで、裁縫を主に家事科にかかわる科目を学ぶと共に、一般教養も深めた。これが、その次の一歩である。

実力は培った。あとは、資格である。もはや進学は無理であったため、自力で教員検定試験に合格するしかなかった。家族に認められぬ中での受験勉強は、さぞ厳しいものであったろう。それでもコツコツ努力し、二年で尋常小学校教員の資格を取った。さらに一歩である。

教師の資格を得たミキ学長は、在学中の勤勉さと資格取得への努力を買われて、母校増川裁縫女学校の助手に迎えられた。いよいよミキ先生の誕生である。しっかりと教員の第一歩を印した。

次の勤務先は、実業補習学校であった。助教諭から正教員になるには、高等小学校の資格並びに専科の資格がいる。勤めながらの受験勉強は、並大抵のものではなかったろう。それでも、高等小学校の資格は無事に取れた。さらに一歩である。

ところが、専科の資格はなかなか取れなかった。努力を惜しまぬ学長は、ついに阿伏兔観音（磐台寺）に籠って勉強し、念願を達成した。それに伴い、ミキ学長は、呉市立阿賀実科高等女学校「正教員」の座を獲得したのである。これで、学長が目指した全ての教員資格を得たことになる。

誰しも、夢を持つ。志を立てる。しかし、世の中、自分の思い通りに運ぶわけではない。さまざまな障害がある。人それぞれに、事情がある。ともすると、その障害・事情を言い訳にして、夢を捨てる。

志を曲げる。楽な方へ逃げようとする。自分で道を切り開き、何としても夢をつかもう、志を遂げようという姿勢が乏しくなっていく。一步一步前進する忍耐強さが乏しくなっていく。今日、その傾向は強くなっているよう。学長は、小学校四年生で教師への夢を抱き、厳しい環境の中で、諦めずに教員への道を歩み、より上級の教員資格を目指して、一步一步忍耐強く歩まれた。その生き方を学びたい。精一杯知恵を絞り努力を惜しまねば、必ず道はあることを。一步一步でも、歩んでいれば必ず目指すところに辿り着けることを、ミキ学長は証明してくれた。

一步一步歩む生き方を、学長は、学校づくりでも発揮している。まず、私塾に近い形の専門学校をつくった。次に高校を創り、その次に短大を創った。続いて大学を創り、最後に大学院を創った。高校も、まず家政科を創り、次に商業科をつくり、そして普通科をつくった。短大も、被服科から始め、食物栄養科を置き、国文科、英文科と増やして、最後に幼児教育学科を創った。大学しかり、大学院しかりである。郷土の文化向上の一翼を担いたいと願って取り掛かった学校づくりを、一步一步の歩みで、とうとう大学院をもつ最高学府にしたのである。改めて、「一步一步」の重みを感じる。

歩みを止めず——人生五十から

人の一生には、幾つかの転機がある。ミキ学長の最大の転機は、県指導主事を退職した時であろう。小学校四年で教師を夢み、ひたすら教師になることだけを考え、教職について後は天職と思って努めて

きた学長である。主事を辞めても、教育から離れることなど到底できなかった。勤められないなら、自分で創るしかない。学長は学校づくりを決意した。一教師から学校経営者への転身である。ミキ学長四六歳のことだった。

ミキ学長の学校づくりを周囲はどう見たか。親代りであった兄勝太郎氏の言葉が大方の評価と思われる。「今から仕事を始めることは賛成しない。その理由は、第一にお前は身体が弱い（当時も病氣療養中であつた）。第二は女が五十近くになって何も大した事はできない。第三はお前はもう教育界では功成名を遂げたのだ、これ以上のことはない。もう未練を持たず無冠となつて気楽な余生を送れ、それが一番よい。……（中略）……事業というものはそんなに簡単にいくものではない。特に教育一筋で生きてきたお前には、経営など出来はしない。……」（『三十五周年誌』四三―四四頁）。これに対し、後日、ミキ学長は次のように書き送っている。「どうしてもやりたい。私は教育に生き、教育に死する覚悟と信念ができていたので、苦勞は覚悟の上です。教育のために苦勞して身体が悪くなつて死ぬのは本望と思つているのだからやります。どうしてもやります。応援してください。」と。ミキ学長のこのことばに、勝太郎氏も全面的援助を約束した。

ミキ学長は、一九三三年（昭和八年）、文部大臣表彰を受けた時、既に学校を創るという夢をもつていた。その夢を持ち続けていた。しかもその夢は、学長の強い信念に裏打ちされたものであつた。すなわち、学長は、生涯、社会に役に立つ人間であらうとし、自分が最も役に立てるのは教育の世界であると

信じていた。こういった信念に裏打ちされた夢を持つていたからこそ、いかなる困難・障害があろうと、学長は実行に移せたのだと言えよう。

夢を実現するためには、三つの条件が必要であると考え。意欲、能力、環境である。学長の場合はどうであつたか。学長は、幼い頃より社会に役立つ人間になろうとし、生涯そうあり続けようとした。しかも、自分がそうあるだけでなく、子ども達を社会に役に立つ人間に育てようとした。長年、教師・指導主事として、教育に没頭してきた。学校づくりに対する学長の意欲を作つたものは、正に「教育愛」だといえよう。

能力はどうか。体力の点では、大病をしていたし、現に病氣でもあつたので、大いに問題があつた。案の上、開校間もなく倒れた。しかし、この時、学長は、たとえベッドに張り付いた状態でも、経営も教育もやれるものだということを実証してみせた。そこまで無理をすることには、大いに異論はあろう。しかし、そんなに無理に無理を重ねた学長が、九十歳を迎えた今日も、なお現役の学長である事実が興味深い。夢と無理とを天秤に掛けると、学長の場合、夢の方が重かつたということだろうか。勝太郎氏の案じた経営能力はどうか。開校以来、経営の危機があつたかどうかは知らないが、今日の発展を見る限り、大いにその力を認めることが出来よう。学長は数字に強い人だと評される。学長自身に手腕があつたことは確かであろう。が、それと並んで、数学が専門で一時期会社経営もしておられた御長男、学干副学長を片腕として育てられたところにも、目を向けるべきだろう。自己の能力には限りがある。それ

を補ってくれる人材を育てることも大事な要因となろう。それにしても、学長が他人の子どもの教育に没頭したため、副学長はほとんど手をかけられ無かったと聞く。にもかかわらず、学千副学長は学長の片腕となった。副学長を動かしたものは何か。一途に教育に尽くす学長の生き様だろうか。

学長の置かれていた環境はどうだったか。兄勝太郎氏の援助を受けられたことは、大いなる幸いであった。経済的バックボーンが確かであることは、何をやる場合でも第一であろう。この点では、ミキ学長は非常に恵まれていた。しかし、それだけに頼らず、ミキ学長は、知恵と人脈を使って、資金づくりをした。この時ミキ学長を支えた人脈の中心は、かつての教え子達である。「蒔かぬ種は生えぬ」を、学長は具現してくれた。

明治、大正、昭和の初めといえ、まだまだ人生五十年という意識が強かった時代である。五十過ぎればおまけの人生の感あり。そんな時代にあつて、五十近くして、しかも病の身であつた学長が、学校経営という一大事業に乗り出した。それは、教師を夢みた延長線上にあるとは考えられるが、やはり、一教員から学校経営者への転身は目を見張るものがある。今や、人生八十年。夢は若い者の特権ではなくなった。夢が生きる原動力であることを、学長が教えてくれた。確かに実行となると、なかなか困難である。しかし、時間をかけ、一つ一つ条件を整えていけば可能にできることも、学長は教えてくれた。これからの高齢化社会を生きていく我々にとって、ミキ学長の生き方は、まさに希望の光である。

最後にミキ学長の人生訓を引いて、この章を閉じることにした。

「私は、人間は常に止まることなく前進しなければならぬと考えている。知識において、識見において、また自分の仕事においてである。歩幅は狭くても、歩数は少なくとも、進むことである。退歩であつてはいかぬ。徳川家康公の教訓に、『人間の一生は重荷を背負つて遠き道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思えば不足なし』というのがあるそうだが、この教えに従つて私の一生も過ごして行くつもりで、急がずに遠い彼方に夢と希望を抱いてぼつぼつと進んで来た。またこれからも進んで行こうと思う。」（『三十五周年誌』七十三頁）。

（植田　ひとみ）